

Title	「ラインホルド・ニーバーの恩寵論：救済恩寵と一般恩寵の弁証法的関係」報告（2014年度第3回人文科学研究会：ラインホルド・ニーバー研究会）
Author(s)	柳田, 洋夫
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.24No.3, 2015.3 :54-54
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=5271
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

2014年度第3回人文科学研究会

～ラインホールド・ニーバー研究会～

「ラインホールド・ニーバーの恩寵論～救済恩寵と一般恩寵の弁証法的関係～」報告

2015年1月19日（月）、聖学院新館集会室にて、2014年度第3回人文科学研究会（ラインホールド・ニーバー研究会）が開催され、五十嵐成見氏（日本キリスト教団花小金井教会牧師）によって、「ラインホールド・ニーバーの恩寵論～救済恩寵と一般恩寵の弁証法的関係～」というテーマで発題がなされた。

まず、これまでの研究においては、人間における「不可能」としての罪と同程度に、人間の「可能性」としての恩寵についてのニーバーの強調がやや軽視され、彼の恩寵論を体系的に論じたものが少なかったこと、さらに、人間に内在する「一般恩寵」（common grace）をニーバーが重視していたことが見過ごされてきたことが指摘された。また、弟リチャード・ニーバーとの対話が、その恩寵理解を深める契機になったという。

以上のことをふまえて、ニーバーにおける恩寵（特殊恩寵）と一般恩寵との関係性を明らかにすることによってニーバーの恩寵論が包括的に理解されるべきであることについての主張と考察がなされた。まず、その一般恩寵論はニーバーの後期に集中しているが、関心そのものは初期から存在していたことが明らかにされた。そして、恩寵（特殊恩寵）について、神話的象徴としての恩寵、「力」そして「救し」としての恩寵と両者の弁証法的緊張関係という側面から分析がなされた。次に、一般恩寵について、人間の自由による他者への庇護の感覚と「不安なる良心」、人間の生によって形成される自己追求と自己犠牲が混合し合った愛、そして、人間のコモンセンスによって形成されてきた歴史的所産（デモクラシー）という諸観点から考察がなされた。たとえば、アメリカン・デモクラシーは一般恩寵論的な影響によって歴史的に形成されてきたものであるという。

最後に、恩寵と一般恩寵との弁証法的緊張関係について、ニーバーにとって、一般恩寵には有用性はあるが、それのみでは、人間の自己偶像化・



上段左：五十嵐成見牧師（発題者）
上段右：高橋義文教授、下段：会場風景

傲慢・責任逃避の罪を免れないのであり、ゆえに、一般恩寵は、神の恩寵によって贖われる必要があるものであったことが指摘された。また、罪の限界の認識をもたらす「救しとしての恩寵」、悔い改めと救しを自覚しつつ、責任的自己を生きるための「力としての恩寵」の重要性も明らかにされた。

発題をめぐっての質疑応答においては、特に、デモクラシー、コモンセンス、キリスト教的リアリズムという視点から、マックス・ヴェーバーやアダム・スミス、さらに宗教をめぐる言論の自由という現代的問題にまで広がる活発な発言と討議がなされ、たいへん有意義な研究会となった。

（文責：柳田洋夫 [やなぎだ・ひろお] 聖学院大学
人文学部日本文化学科准教授・チャブレン）